審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲　第 1318 号	氏名	矢野　千葉
審査担当者	主査 野村政壽 (印) 村 副主査 石竹達也 (印) 副主査 谷原真一 (印)		

主論文題目：

Overweight improves long-term survival in Japanese patients with asthma

(過体重は日本人喘息患者の長期生存を改善する)

審査結果の要旨（意見）

本研究は、大牟田市大気汚染関連健康被害コホートプログラムに参加した 697 名の成人喘息患者データを活用し、肥満（BMI）と死亡率の関連を解析した精度の高い臨床研究である。肥満は喘息の増悪因子であることが知られているが、本研究では肥満度を層別化し、肥満予備軍(BMI25 以上 30 未満)では喘息患者の長期生命予後が改善する可能性を示唆している。すなわち、喘息患者の体重の管理目標に関して示唆を与える、臨床上極めて重要な研究成果と言える。高齢化に伴い、喘息を含めた慢性閉塞性肺疾患(COPD)は増加している。COPD に対する治療法として、既存の薬物療法、運動療法のみならず、食事療法を加えた三位一体の治療の重要性が示唆される。今後は COPD 患者の予後改善に対し、栄養代謝学の視点からの新たなアプローチによる研究の展開が期待される。

論文要旨

肥満は治療困難な重症喘息の危険因子である。喘息と肥満の長期での関連は明らかになっておらず、日本人の成人における肥満と喘息関連の長期死亡率との相関を調査した。大牟田市の大気汚染関連健康被害コホートプログラムにおける大気汚染関連呼吸器疾患の 3,146 人のデータから 697 人の成人喘息患者を解析した。コックス比例ハザードモデルを用いて、体格の異なる患者の総死亡率および呼吸器疾患関連死亡率を比較した。体格の分類は WHO の肥満基準に基づいて行った。26 年の観察期間中に 697 人の患者のうち 439 人が死亡した。低体重、正常体重、肥満予備軍、および肥満 I～III 度に分類し、人数（全体の%）はそれぞれ、75（10.8%）、459（65.9%）、140（20.1%）、および 22（3.3%）人であった。肥満予備軍において、総死亡率および呼吸器疾患死亡率のリスクが大幅に低下していた。以上より、我々の研究では軽度肥満であることが喘息患者の長期死亡のリスクを減らす可能性があることを示した。しかし、我々の研究に含まれる肥満患者数が少ないため、喘息では肥満が長期転帰に及ぼす影響は依然として不明である。我々の調査結果は、栄養・運動の介入が日本の喘息患者において重要であることが示唆される。